

ガネフオへの想い

山本 健（79歳）
(慶應大学出身)

「いつの日か天空から神の使い現われ、永い白人のいじめ、圧政から、われらを救い出す」これがフィリピン、マレーシア、インドネシアなどの住民に共通して信じられ、伝わってきた神話であった。昭和16年の日本軍の進撃後、解放され、さらに終戦後も日本義勇軍が現地軍と一緒に戦い、ついに独立が出来た事を現地の人は忘れていない。戦後の日本の自虐的戦争観で日本が侵略戦争を仕掛けたことになっているのは、戦争勝利者の誘導であって、事実は親日的アジア人が特に南アジアに多く存在することが証明しています。

まさにこの時の独立の英雄として、ムルデカとスカルノが讃えられています。一方日本では戦前からの巨魁 頭山満の「大アジア主義」が時の権力に讃えられ、燃料（油田）の確保とともにアジアへの進出を、の根幹となっていました。民間でもアジア各地で、のちのリーダーとなる志士を育て、時にはかくまつたりしていました。彼らは日本が白人を駆逐した後に独立国家を作ったのでした。

この二点を対比した時、「ガネフオ」の持つ意義と日本の立場、先方が期待する日本への想い、さらには頭山満の孫、頭山立国と主導するスカルノ大統領との結びつきが鮮明に浮かんでくるのであります。そしてその頭山立国が慶應大学の水球で私より3年下の井形の友人であり、ガネフオへの日本水球チームの参加を頼んできたのでした。昭和38年2月、芝の森ビルで対面、井形と共に懇談した。当時被占領地になっていた日本で教育を受けた自分には全く知り得なかった事や、当時の日本が必要としているアジア貿易等を説明され、スポーツ分野でそれが役立つ事に意義を感じた。理解と共に協力を約束した。

その頃勤めていたアサヒビール株式会社では販売課という営業部門で板橋区と中野区を担当し、当区内の酒屋、問屋、飲食店を回っていた。多忙の中でも時間は自由であり、不動産屋の友人と共に2~3のアパートを見て回った。江古田にある部屋に決めたと思うがこの点ははっきりしない。いずれにせよ電車の便がよく10人ほどが集まるれるスペース、連絡のとりやすいところを基準とした。契約時に一回行っただけなので、たたずまい等は定かではないが、2部屋ほどの疊敷きで索漠たるものであったと思う。しかし拠点を作らないと人集めもままならないと思われたので、我慢しつつ、ここで選手結成の足掛りをつけられるようにとの願いで契約した。呼びかける選手候補者がそれぞれ勤め人であり、時によっては公にできない面もあったことも一因であった。

選手集めの方は菅久→浜野→日大、成城、法大と58クラブラインも使って少しづつ拡大した。1か月ぐらいして、菅久の談話がスポーツ新聞に囲み記事で載りこれによりガネフォ派遣についての決意が公となつた。

自分としてはローマ大会に至るまでのその前年一年間の合宿、各自の会社退出時間に合わせ深夜に及ぶ練習を重ねた仲間、殆どが下級生であったが一生懸命練習相手を務めつつ海外試合の夢に一緒に向かっていた選手が結果として派遣選手の練習相手であったことを心痛く思っていた。彼らの労力、精進なしではオリンピック選手たちの技術向上、特にチームとしての試合感覚は、14名の試合形式の練習で得られるものであった。そして、結果は勿論やむを得ないことではあったが候補選手を25名から一定期間の合宿を経て15名に絞り、さらに直前に至るまで一緒に泳いできた中から5名が開催一か月前の全日本の試合後、外された。

この時の決勝では全日本選抜チームが全日大に敗れたことも影響し、最終人選に紛糾したようであったが難航の末、一人の入替えで発表された。余談だがこの人選の結果はローマオリンピックでの本試合に多大に影響し、中盤からの攻守の球つなぎに不満を残し、我々守備陣は「荒川八ちゃんが居てくれたらなあ・・」と嘆くことしきりであった。急遽選ばれた日大の若手は最後まで出場の機会は無かった。

自分はローマ大会に選ばれた事と今回のガネフォに共鳴することに複雑な思いがあり、自分のことは、後回しであると思っていた。一方水連や、水球OBに對しては、東京五輪を目指す練習で監督から、次のキーパーを育てるからお前は来なくてよいと言われ、かなり不満が高じていた。ローマでは出場の機会がなく試合ができなかつた分東京ではとの想いが多分にあつただけに残念であった。鬱積したもろもろの感覚を抱えつつの「ガネフォ」の話であった。当時友人でもあった頭山君の弟（立国）が井形の同級であり、この話のキーマンで、日本選手団のヘッドになるという展開であった。このことを同じ頭山一門につながる長老のH氏に相談したところ、「アジアでの日本への心からの協力者は、カンボジアが一番で、スカルノは以前良かったけど今は調子に乗ってるな」と言い、さらに「河野一郎がやるなら、まあいいんじゃないの」との事であった。延々とアジア諸国への日本の協力を語られて辟易したが、ガネフォへの感覚が別の面からも認識された。

選手集めは各個人の仕事上の都合に左右された。海外試合に参加できるという選手経験者の夢が現実として身近になつたが故に本人にとっての決行の是非は一に会社の姿勢で、所属の会社が日本政府の本音を見て社員を励まし後押し

するか、または水連の意向に沿うかの判断にあった。本人も行きたい思いが会社に通じるかとの他に、直接水連やその意を受けたOBからの圧力に耐えねばならなかった。自分のところにも、超OBで前監督のN氏から電話があり「分かっているだろうけど参加するな」と言われた。

多くの障害を越えて参加者が増えてきた中で、伝えられたキーパーの参加者は3名となりそうで房野、井形、山田の3名に山本では4人となるので、これも断念の一因となった。

この後選手が一堂に会し、10名を超えたとの菅久からの連絡で安堵したが、ここからは選手諸君の方が詳しいと思う。自分は外部から応援することで、成功に向かう選手団に期待を寄せた。

時を経て、選手団の直前の合宿練習が伊豆の峰温泉で行われた。単身自動車で出来たばかりの伊豆スカイラインを下り慰問に行った。旅館につき大広間でゴロゴロしている皆の所へずかずかと入り「ご苦労さん」と声をかけた。各学校入乱れてのびっくり顔が面白く、それは訪問客が過去自分一人しか居なかつた事を想起させた。プールは小さく、更に寸法を測って作られたゴール状のロープをみて胸が熱くなった。プールサイドからの叱責ホイッスルの音などは無く、普段の練習情景とは違つて静かなものであったけれど、一人一人の熱心さはしばらく離れていた水球を自分に復活させようとの願いで、共感できるものであった。個人が熱心に向上を図る姿は、大学の練習というより、イタリアのクラブチームの自由練習のような雰囲気で、このリラックス感は国際試合に出るには丁度良いのかなと思い、急遽作られた新チームがやっとここまで来たとの思いも込み上げるのであった。

程なく出発前夜となり、芝の旅館に全員が集合した。集まった選手たちの顔には、もう何の迷いもなく、晴れ晴れとしていた。訪れた何人かのOB表立って支援活動が出来なくてもみんな心で応援していた。結果として、いじめてた水連を押し切った選手たちであった。集まったOBも壮途を祝った。しかし、この頃はまだ戦後の名残もあり、中国を立てるスカルノのガネフォ大会は容共派として日本のマスコミからも冷たく扱われていた。たまに記事が出ても多くは揶揄的な興味本位なもので、その趣旨に触れるることはなかった。またガネフォ大会が始まり、盛況裡に終了したことの大半は報道されなかった。

今思えば、もう少しマスコミ対策に中央からの一工夫があれば、選手としてのグレードも上ったと思う。歴史的にも、この後、現在に至るまでの日本のアジアとのあらゆる面の交流に多大な貢献を残しただけに残念である。しかし、もうもろの障害を乗り越えて参加した選手にとって、この貢献は誠に大きなはなむけであり、誇りにしてよいと思う。何よりも現地での親日感は選手自身が身を

持って体験していると思うし「日本が来てくれた」という現地国民から大統領に至るまでの喜びを共有して受けたと思う。

選手帰国後、神田の中華やで歓迎したことを覚えている。土産話のあれこれのうちに浜野が現地フランス混血娘との交流を得々と語ったのは印象的であった。私には国鳥である「極楽鳥のはく製」を頂き感謝している。今も時折鑑賞させてもらっている。

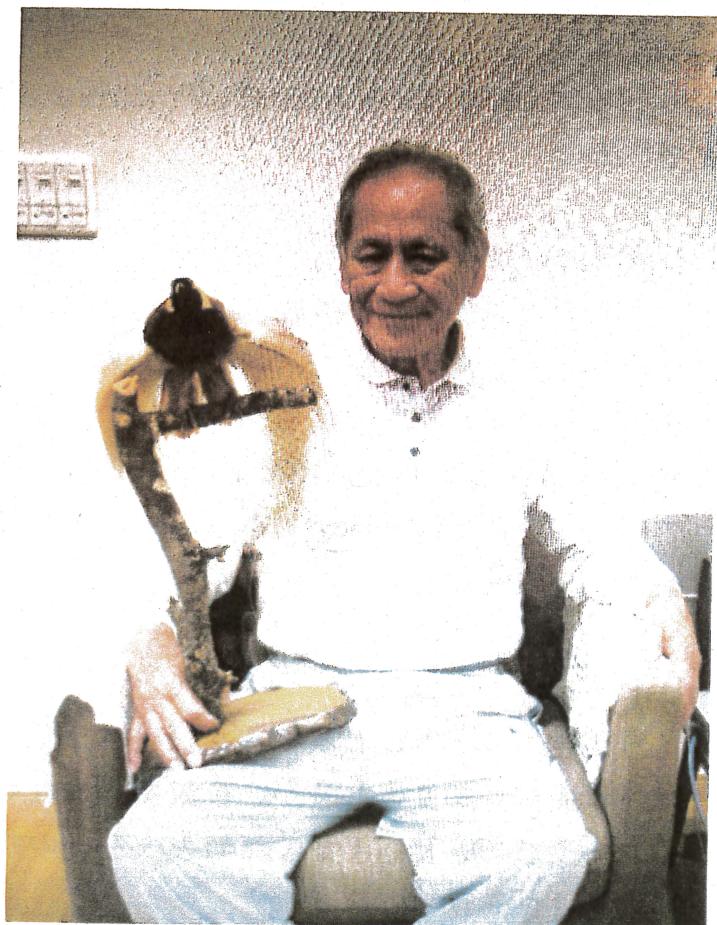
帰ってきた選手がその後の人生にこの国際交流を大きな土台として羽ばたいて行った。日本の為だけでなく、個人としても大事なことを身に着け、立派になったことは良かったと思う。出征兵士の一人一人が日本の歴史を作ったと同様に、この時代にガネフォに参加した事は冒頭に書いた「神兵」とさえ思える。各選手がこの思いを胸に充実感を持って歴史に名を残すことを願ってやまない。最後に皆さんと関係者のご多幸を祈ります。

参考文献

2014年2月29日発行 祥伝社

ヘンリー、S 、ストークス

「連合軍戦後史観の虚妄」



極楽鳥の剥製とゴンさん

2014年4月 撮影